

新潟薬科大学 学長／千葉大学 名誉教授

山崎 幹夫

Mikio Yamazaki

茅根

甘味もつ救荒の植物

チ

ガヤ(茅)というイネ科の植物は、暖地の荒地、堤防の斜面などに群生する多年草である。30～70cmほどの茎に白い絹のような毛の密生した円筒形の花穂をつける。ようやく葉の間から頭を出したばかりの花穂は、ほのかな甘味をもち、昔の子供たちはおやつがわりにしゃぶったものだという。チガヤをツバナあるいはチバナとも呼ぶのは、この茅花(ツバナ)に由来する。細長い葉は燃って縄などをつくるのに利用される。

最

近は珍しくなったが、昔の民家の屋根はほとんどが茅葺きか、藁葺きであった。ここで使われた茅はチガヤではなく、同じイネ科に属するススキ(芒または薄)のことであって、ススキは屋根を葺くほかに縄、草履、炭俵などをつくるのにも利用された。

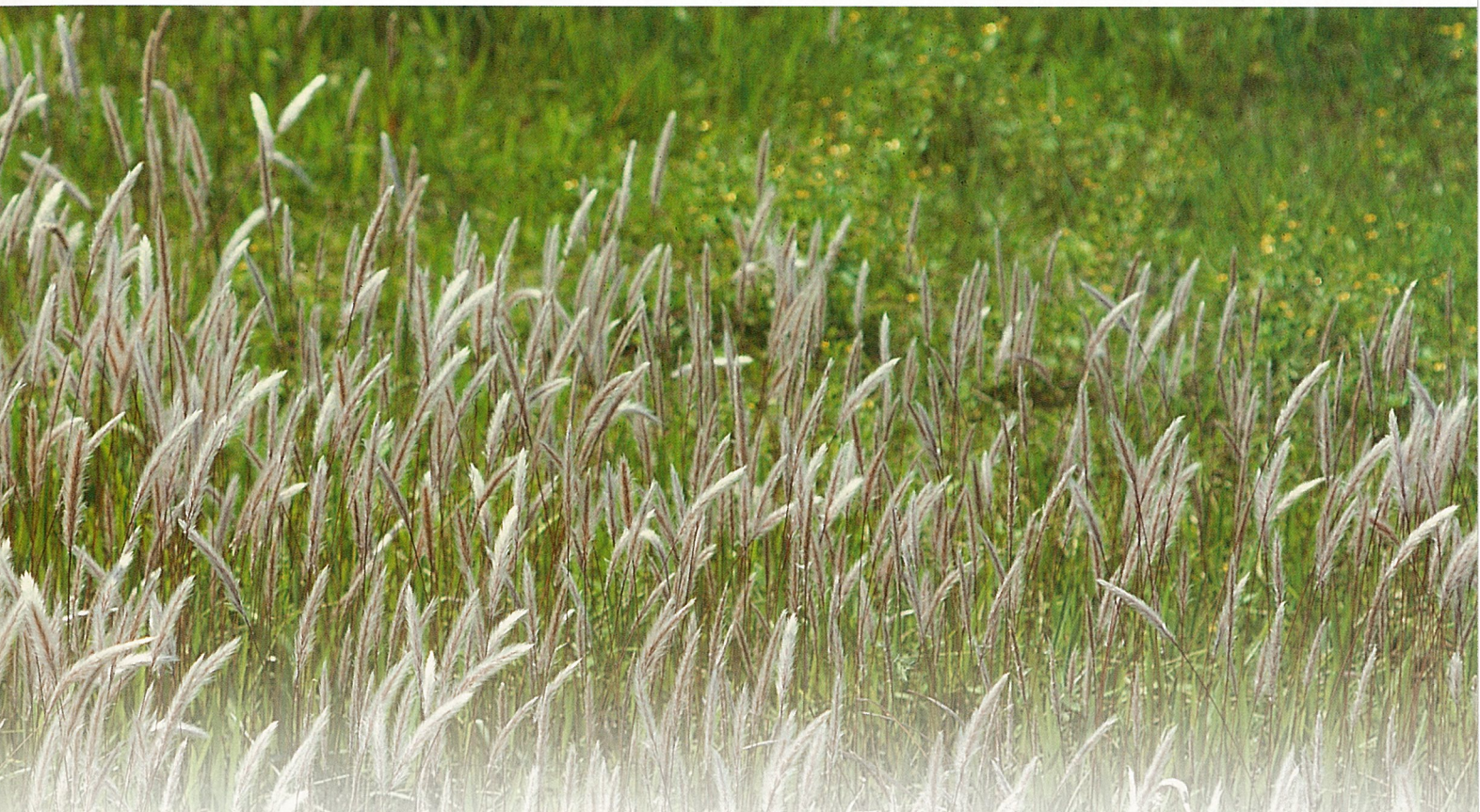
も

う1種、イネ科には葦簀や簀子あるいは屋根葺きなどの材料として利用される植物がある。川原や沼地などの湿地帯に群生するアシ(ヨシともいう、葦または蘆)である。古く、わが国には一面に湿地帯が広がり、群生するアシに覆われてい

て、「豊葦原」と称されたとも伝えられるが、アシはわが国だけでなく世界中に広く分布し、葦舟によって大洋を航海した海洋民族の話も伝えられている。屋根葺きや葦舟には1～3mにも及ぶ茎が利用される。若芽は食用にもなる。

ま

た、地下に長く伸びた根は中国では蘆根(ルーゲン)と呼ばれて薬用とされた。中国には蘆根にまつわる民話も残されている。揚子江のずっと南の、とある山里には薬を売る店が1軒しかなく、店の主は儲けるばかりで人情味がなく、嫌われ者であった。あるとき、貧しい農家の子供が急に高熱をだし、困り果てた父親はこの店に駆けつけて薬を求めた。しかし、店主は高価な羚羊角を農夫に押し付けて「金が払えなければお前に売る薬はない」と追い帰した。父親が情けなさに子供の枕元で泣いていると、折から門口に立った修業僧が一部始終を聞いて同情し、「池のほとりに生えているヨシの根を掘ってきて煎じて飲ませなさい」と教えた。農夫が言われたとおりにすると子供の熱は下がった。それから、村人たちは高熱を出しても儲けばかりの店主から高い薬を買わなくなったという。



つ いでに言うと、菅笠すげがさのスゲは、笠のほかに、やはり、縄、草履、蓑づくりにも利用されるが、この植物はイネ科ではなく、寒帯から温帯にかけて広く分布するカヤツリグサ科の植物である。カサスゲ、ショウジョウスゲなど、葉の長い品種が上記の目的に利用される一方、葉に白い縦皺のはいったカンスゲは観賞用の植物としても栽培される。

と ころで、チガヤは、畑地や荒地に雑草として繁茂し、取り除こうとすると、地下に長く横走る根茎を掘り起こすのが大変な作業になる。ずいぶん昔の話になるが、私が尊敬し、師事していた薬用植物の教授が、折から需要が高まり、まだ大量栽培の方法が不確実であった除虫菊の栽培実験を思い立ち、そのために、近郊の農家から借り受けた荒地を耕して畑地にしようと私たちに提案した。若かった私たちは、早速、一面にはびこるチガヤを刈り取り、根を掘り起こして畑地づくりに取り掛かったが、山のように積み上げられたチガヤの根を見た教授は「チガヤの根は茅根といって利尿剤になり、止血、発汗にも使われる生薬になる。このまま焼き捨てる前に、その成分を研究してみよう」と

言われた。茅根の成分としては、当時はクエン酸、シュウ酸、リンゴ酸等の有機酸の存在が知られるだけであったが、私たちは燃やしたあとに残る多量の灰分を集めて、カリウムの含量を測定してみた。すると、茅根にはいわゆる利尿生薬とされていた牛膝じつ（生薬全重量に対するK含量%：1.16）、梓実（莢：0.27、実：0.09）、木通（0.25）、麻黄（0.99）等に匹敵する0.73%ものカリウム分の含有が認められた。また、チガヤは若い花穂の基部だけでなく根茎についても甘味をもち、昔から救荒植物の一つとしても数えられてきたことから、茅根の熱湯抽出エキスをイオン交換樹脂で処理して塩類を除き、濃縮して糖類（還元糖）の存在を確かめたところ、蔗糖、ブドウ糖、果糖、キシロース等の含有が確認された。ちなみに、抽出エキス中の還元糖量を定量したところ、ブドウ糖に換算した含有量は茅根の6.8%であった。

思 えば、大学在学中の夏休みに研究室の片隅を借りて行ったこの実験結果の報告が、私にとっては、それから半世紀にも及ぶ研究生活における初めての論文であった。